

指定候補文化財について①

- 1 名称及び員数 木造地蔵菩薩立像 1 軀
- 2 文化財の種類 有形文化財（彫刻）
- 3 所在地 厚木市金田 262 番地 宗教法人建徳寺
- 4 所有者 厚木市金田 262 番地
宗教法人建徳寺 代表役員 吉田 正道
- 5 構造・法量 木造 彩色 玉眼 寄木造り
像高 96.4 センチメートル
頂一顎 14.6 センチメートル
面幅 10.2 センチメートル
耳張 12.5 センチメートル（現状）
面奥 13.0 センチメートル
胸奥 12.1 センチメートル
腹奥 14.5 センチメートル
肘張 17.0 センチメートル
裾張 27.8 センチメートル
裾裾張 20.2 センチメートル
足先開（内） 8.5 センチメートル
（外） 16.0 センチメートル

6 所 見

本像は、臨濟宗金田建徳寺の本堂内に安置される木造地蔵菩薩立像である。

地蔵菩薩と臨濟宗の関係は深く、鎌倉建長寺の本尊が地蔵菩薩像であることや、臨濟宗を庇護した足利尊氏が地蔵菩薩を信仰していたこともあり、鎌倉を中心とした臨濟宗寺院には地蔵菩薩像が祀られている場合が多い。相模川流域の寺院にも本像や相模原市光明寺の地蔵菩薩像が伝わる。

建徳寺は、鎌倉建長寺の末寺で、鎌倉幕府の御家人で依知郷地頭本間六郎左衛門重連が、先祖忠家供養のために創設したと伝えられる。現在も本間氏累代の墓碑二十八基と、更に、江戸時代の旗本小河氏の墓碑が現存する。慶安二年（1649）幕府から朱印地十石を与えられ、また、旗本小河氏から土地の寄進をはじめ保護を受けた。

本像は、右手に錫杖、左手に宝珠を持って立つ通形の地蔵像である。構造としては、寄木造りで玉眼を嵌入し、白毫には水晶を嵌めている。像表面は現状古色を呈しており、木寄せは、頭部耳後で前後二材矧ぎとなっている。一見として、長身な姿が印象的な像である。全体としては肉付けにやや不足があり、また軀部造形に抑揚が余りみられない。しかし、面相に見る張りのある意志的な表情は注視すべきで、また、やや硬化しているものの、着衣の衣文彫出なども宋元風の装飾的な表現となっている。制作時期は、未だ鎌倉時代の余風を残す作風からみて、南北朝ないし室町初期頃と推定される。

以上、本像は厚木市にとって地域の歴史を考える上で重要な文化財であり、市指定文化財として誠に適切なものであると考えられる。

【参考文献】

『厚木市史 近世資料編 (1)社寺』昭和61年 厚木市

『厚木市史 中世資料編』平成元年 厚木市

『特別展図録 相模川流域のみほとけ』令和2年 神奈川県立歴史博物館

『相模川中流域の仏像彫刻に関する調査研究』令和4年 神野祐太